

記憶の断絶とは何か

交通事故被害当事者による事例報告と考察

樫本喜一*

はじめに

まず断っておくと、筆者の専門とする研究は、日本における原子力問題の歴史である。周囲に生命倫理の研究者が多く、話を聞く機会に比較的恵まれてはいらぬ。また、自らの研究に隣接する環境倫理的な問題は視野に入れているつもりだった。だが、正直なところ生命倫理とその周辺問題は門外漢である。その筆者が、敢えて生命倫理上の問題に容喙するのは、先般、かなり酷い交通事故に遭遇し、否応なくこの問題に向き合ったからである。

自身が体験した交通事故では、事故発生時に頭部を二度ほど強打した模様である。「模様」としたのは、詳細は後ほど述べるが、事故瞬間を含む前後一、二時間程度の記憶が「存在しない」からである。そのほか、複数の骨折・外傷などを被ったが、最も心配されたのがこの頭部打撲であり、救急搬送先の主治医は脳外科担当の医師であった。

幸運にも筆者自身は陥ることを免れたが、臓器移植用ドナーとなりうる事故被害者の脳死状態が発生する一般的、あるいは典型的な状況と考えられる。また、頭部外傷が引き起こす意識障害(記憶の部分的喪失)に関しては、筆者もそれを免れることはできなかつた。当該状況ではどのような事態が当事者に生起するのかを、当事者としての語りで報告してみたい。むろん、脳死状態となつてしまえば、その体験は語り得ず、たとえ漸近的体験であったとしても両者は異質なものに違いない。過度に自身の体験を一般化することは慎みたい。それでもなお、本事例報告から何がしかの知見は得られると考える。聞き取り調査などによるものではなく、分野は違うものの研究者が自身の言葉でこのような体験を語るという事例は希少であろう。筆者の体験がどなたか専門家の研究に役立てば幸いである。

なお、いわゆる臨死体験的な内容は本事例報告には存在しない。一方、この文章自体が、筆者本人のトラウマ的経験を、自ら語ることによって対象化し、それによって何がしかの克服を得ようとするものであることは否定しない。

* 大阪府立大学人間社会学部客員研究員

1. Endless Eight

本節では事故が発生した状況について説明する。

事故発生日時は、2011年8月9日午前1時30分頃である。天候は晴れ。場所は北陸自動車道下り線1.6キロポスト付近、滋賀県内長浜IC近くの新潟方面行き車線だった。ただし、このデータは、筆者自身の体験と記憶に全く基づかない単なる伝聞情報である。

事故前日8月8日の午後遅く、筆者は、自家用車で北海道・青森を目的地とする旅行に出発した。この旅行は講師として勤務する複数の職場（大学・高校）の夏季休暇にあわせて、ここ数年、毎回出かけているものであり、目的地までのルートも毎度ほぼ同じ高速道路と国道を利用している。いわば通いなれた道であった。なお、旅行の主要目的は、研究テーマにしている使用済核燃料再処理工場立地問題の歴史的経緯を解明するための資料収集である。本論考とは関係がないので研究の詳細は割愛する。

大阪府吹田市の自宅から、夕食を済ませ、旅行用の荷物一式を自家用車、ホンダ製軽四輪貨物のアクティストリート（いわゆる「軽の箱バン」である）に積み込み出発したのは午後10時を回っていた。3週間近い旅行のため積み込む荷物が多かったことと、旅行中に使用する車中泊仕様の備品の取り付けに時間がかかったことなどが出発時間の遅い原因である。しかし、料金が通常半額となる高速道路のETC深夜割引を利用するつもりだったので、これは想定範囲内である。

調査が主たる目的とはいえ、趣味を兼ねて自費で行く気ままなドライブ旅行だった。旅立ち前の軽い高揚感、ワクワクした感覚があった。夜は遅かったが、気持ちは明るかった。

出発後、吹田インターから名神高速道路に入り、そこから京滋バイパスを利用した。京滋バイパスから名神高速に再度合流したところにある、草津パーキングエリアで一回目の休憩を取った。その後、名神高速を再び北上し、二回目の休憩を滋賀県が多賀サービスエリアで取った。手洗いを済ました後、車に乗った際に時刻を確認すると、既に午前0時を過ぎていた。

車は車中泊仕様であり、軽貨物車ではあるが後部座席をたたんで荷室全体は快適に睡眠がとれるようにしつらえてあった。キャンプ用断熱マットの上に夏用のい草カーペットを敷き、自作の窓枠用網戸を後部ドアのガラス窓に取り付けてある。市販の自動車用カーテン及びフロントガラス用シェードも装備していた。そもそも当初から、高速道路のどこか適当なサービスエリアで一泊する予定であったので、ここで仮眠をとっても全く問題はなかった。ふと「ここで泊まるのか」とも考えた。だが、まだ眠くなかったため、もう少し先の北陸道に

入ったところにあるサービスエリアかパーキングエリアまで足をのぼそうと思い直した。多賀サービスエリアは設備が整っており、ここで夜を明かすドライバーが多いので、混雑を避けて人の少ない北陸道に入ろうとした部分もある¹。

やはり多賀サービスエリアから出発しようとして、車を走り出させた。エリア内出口付近、ガソリンスタンドの手前で大型トラックが先に本線合流に入ろうとしていたので道を譲った。そこで記憶が途切れている²。

気が付くと何処か知らない建物の中にいた。台のようなところに寝かされているようだった。妙に明るい場所だと感じた。周りが騒がしかった。身体がうまく動かさなかった。首にコルセットを着けられていた。はずされた後も首が硬直したようで、周囲を見渡すことができなかった³。

誰かに、今日は何日かと尋ねられた。とっさには答えられなかった。ぼんやりしたままだったが、考えていると曜日だけが分かってきたので、月曜日から火曜日へ変わったところではないかと答えたように記憶している。

左右の人差し指同士を胸の前で合わせられるかと尋ねられた。やってみたら何とかできたようだ。動作がもどかしかった。夢の中で身体を動かしているような感じがしたと思う。現実感も、夢と区別しにくい感じだった。事故に遭ったのかな、と思った。だが何も思い出せない。現実感がない。

自宅の電話番号を聞かれた。うまく出てこない。なんとか答えたが、一人暮らしなのでこの電話には誰も出ない。そのことを伝えた。すると、連絡の取れる先を聞かれた。両親のいる実家の電話番号を答えた。番号を答えるとき、これもとっさに出てこず、苦労したように感じる。寝起きに複雑な話を聞かされたようだ⁴。また、答えた後、両親に知らせる必要はないと言い張ったことは憶えている。

旅行では、既に北海道に渡るフェリーの予約をしていた。この予約を変更しなければならぬな、とぼんやり思った。その時、旅行そのものを中止する必要があるとは考えなかった。車の修理が間に合うかな、とも思った。車は何処に

¹ 本文章のように自身に降りかかった災厄を回想する場合、人間の一般的感覚として、事態が回避可能だった最後のチャンスにそれをしなかった自らの判断について、後悔の念を感じてしまうようだ。筆者も例外ではない。事故前に関しては、この文節で描写した記憶がもっとも主観的に強くある。実際のところとしては、この記憶が反復され、結果的に強化されるという、認知的なバイアスがかかっていると考えるのが妥当であろう。

² もし事故の状況がほんの少し違っていたら、ここで終わっていた。このような文章も書かれることはなかった。ただ、今回の場合でも、あるいは、万一「即死」もしくは「脳死状態」に陥った場合でも、この先、事故瞬間までの記憶は本来「存在する」はずである。では記憶が存在するとはなにか。自ら混乱することになるこの疑問が、本論考を記す主要な動機である。

³ 後に分かったことだが、頭部外傷でダメージを受けた場合、頸部の硬直がみられるとのことだ。その典型的症状である。

⁴ 痛み止めの麻酔薬が入った点滴を入れられていたので、おそらくその影響もあると思われる。

あるのだろう。

おそらく同時に怪我の処置をされていたように思う。印象に残っているのは、左足の踵部分の肉がぱっくり割れていたことだ。靴底の踵部分が取れかけたような状態だった。そこを消毒された後、包帯でぐるぐる巻きにされた。特にこの左足踵部分の傷が一番痛かった。右足の小指付け根も裂傷があったので数針縫われた。右足の傷口を縫合されている時は、麻酔が効いていたのか痛みは感じなかった。身動きが取れないはずなのに、この処置をされたところはなぜか憶えている。足を上げて傷口を見せられたからかもしれない。良く分からない。

身体の他の部分もあちこち痛かったが、局所的な激痛はあまりなかったように思う。何処を怪我しているのかよく分からなかった。身体が起こせない。自分の身体を自分で見て確認できない。どこか神経が切れて身体が麻痺しているのではないかと疑い、とりあえず手の指と足の指を動かしてみた。手足とも各指は動くことは動くようだ。しかし身動きできないまま、仰向けになっていることしかできなかった。

混乱したままだったので、入れ替わり立ち代わり何かの処置をされたような気がするが、よく憶えていない⁵。実際には前後関係も確実ではないが、それが一段落した後であろう、おそらく警察官によると思われる事情聴取があった⁶。

事故について何か憶えていることはないか、と尋ねられた。だが、全く何が何だか分からなかったので、そう答えるしかなかった。逆に、何があったのか、こちらから尋ねた。詳しい状況は教えてくれなかったが、玉突き事故の先頭らしいとのことだった。自分のせいで誰かが怪我したかどうか非常に気になったので、それを尋ねた。なお、真っ先にこの質問をしたのは、交通事故の加害責任があったら嫌な思いをするだろうと考えたからである。確か、この時、警察官に、自身が前職で自動車関係の業種に勤めていたことを言った覚えがある⁷。この心配は杞憂だった。大怪我をしたのは筆者だけだった⁸。

この事情聴取の際だったと思うが、警察官に連絡先を聞かれた時、携帯電話の番号を教えたようだ⁹。携帯電話の番号は（普段でも）記憶していないので、かばんのポケットに携帯電話を入れていることを伝えたと思う。筆者が自分で携帯電話番号を調べたか、警察官が勝手に調べてくれたか、そこはよく憶えていない。携帯電話やノートパソコンなどは、かばんに入れて助手席に置いていた

⁵ 頭部と上半身の CT スキャンを各々実施された模様である。

⁶ 次節で詳細は説明するが、被害者供述調書を取りに来た警察官二人の声に聞き覚えがあり、実際に事故直後に筆者に話を聞いた者だと自己紹介された。なので、この事故時の事情聴取を遡行的に解釈して、記憶していると認識している可能性は否定できない。

⁷ 筆者は以前、日本自動車連盟関西本部大阪支部に勤務していた経験がある。

⁸ はっきり判ったのは後のことである。

⁹ 後、警察から携帯電話に連絡が入ってくるので、おそらく間違いはない。

が、救急隊員か誰かが気を利かせて一緒に病院に持ってきてくれたようだった。携帯電話は、その後、ズボンのポケットに入れた。

口の中がジャリジャリして気持ち悪かった。女性看護師に水を口に含ませてもらってうがいをしたら少しましになった¹⁰。ここで、ようやく一段落ついたように思う。

救急処置や警察関係の聴取もおわり、周辺の慌しさが途切れてきた。だが、まだ身動きがとれず自分の身体がどうなっているのか分からなかった。そこで、携帯電話のカメラで自分の写真を撮ることを思いついて実行した。左手だけは動かせたので、左手で操作してやってみた。そこに写っていたのは、打ち負けたボクサーのように両方のまぶたが黒ずんで腫れ上がった自分の顔だった¹¹。

この後、人生初、ひと夏の入院生活が始まった。

2. Beautiful Dreamer

入院当日から次の日にかけては重篤な患者用の個室だった¹²。そこへ一泊した後、四人部屋に移動した。窓側のベッドだった。空調が効いた病室からは、伊吹山が見えた。ここは滋賀県の長浜赤十字病院の救急病棟である。

結局、主な負傷箇所は、頭部打撲による外傷性くも膜下出血、右上腕骨頸部骨折、右手第五中手骨骨折及び肺挫傷だった。その他打ち身や切り傷は無数にあったが、幸い神経が切れた箇所はなかった。右腕肩の付け根が斜めに折れ、そして右手の手のひらと指と手首が骨折と打ち身で腫れ上がっていた。右手が利き腕なのでこれには往生することとなった。右腕はギプスで固定するのではなく、大きな伸縮性のある布で身体に固定した上、三角巾で吊るした状態だった。寝ている時にはクッションを右腕、肩の下あたりに入れたが、痛みは強かった。また、肺挫傷と肋骨のひびで、起き上がる時や動作を始める時、それに咳をした時にひどく痛んだ。しかし、2日目からは自分で歩いてトイレに行くようにした。起き上がる時の肋骨の痛みと歩く時の足の傷の痛みは我慢した。電動ベッドを起こして、ベッド上で座っているのが一番楽な姿勢であった。

最初に触れたが主治医は脳外科の医師だった。やはり頭部打撲による外傷性くも膜下出血が一番警戒されたようである。だが医師の説明では、今後 CT による検査を行って経過を観察し、それで異常がなければ外科的な手術をする必要は

¹⁰ フロントガラスの細かな破片が口に入っていたものと思われる。ズボンのポケットや服のあちこちにもガラス片が付着していた。

¹¹ この画像データは今も残っているが、撮影した時刻は午前7時を回っていた。

¹² この入院生活の手続き等は、事故当日の朝に大阪から駆けつけてくれた両親が行った。この年齢で両親の世話になるのは非常に面目ない次第である。感謝とともに申し訳なく感じている。また、弟にも大破した自動車から重要な書類等を回収してもらった。同様に感謝している。

ないだろう、とのことであつた。2回、頭を打つたという話だったが、それが原因の頭痛はなかつたと思う。身体中が痛いので、それにまぎれてしまったのかもしれない。ただ、ぶつけた顔面、左頬から左目の上にかけては痛みと違和感がその後も残つた¹³。

身体的な痛みや違和感以上に筆者を苛んだのは、記憶の不連続による非現実感である。依然として事故時の記憶が戻らず、今、入院しているということが、現実のこととして納得しきれていない。そんな感じが入院中、常につきまとつた。玉手箱を開ける前の浦島太郎のような感覚といえるかもしれない。今見ている長い夢から目を覚ますと、この状況とは違う「現実」に戻るのではないか。そういった感覚である。だが、その違う「現実」というのが、今よりもっと酷い状態ではないかと疑う気持ちの方が強かつたと思う。生命に別状なく、なんとか自力で動いていると思つている今の状態が夢で、実は目が覚めると身動きも取れない状態ではないか、というような悪夢的感覚である。

数日の間に、保険会社の担当者や加害者の一人(玉突き衝突の後続車)が来て、事故時の状況を断片的に語つたが、話が曖昧で余計に混乱した。こちらに過失があるのかなのか、それすら分からなかつた(実際のところ過失はなかつた)。

事故当日から約一週間経つた8月17日、携帯電話に予告があり、高速隊の警察官2名が面会にやつてきた。被害者供述調書を取るためとのことだつた。やつてきた警察官は、事故時の現場担当者だとの自己紹介があつた。声に聞き覚えがあるような気がした。手慣れた感じで、話をするために病棟階上の入院患者用食堂へ案内された。この後、彼らによって初めて自分の体験した事故の詳細を知つた。自らの失われた時間を他人の口から説明される。誠に奇妙な体験だつた。なお、本論の文章構成において、話の順序は、事故直前→救急搬送後→入院生活→事故発生状況となつており、叙述上のレトリックを駆使しているように思われるかもしれないが、この叙述シーケンスは筆者の主観的な時間の流れに沿つた記述である。実際、筆者自身が「呉一郎」¹⁴になつたようなものだ。叙述トリックを利用した変格推理小説の登場人物になつた気分である。

身元確認の後、事故時の記憶は戻つたかどうか尋ねられたが、全く戻つてなかつたので、そう答えるしかなかつた。警察官は、良くあることですといつて、特にそれを問題視しなかつた。そして、図を示しながら事故の状況を説明してくれた。

次に述べる内容が、筆者の被つた交通事故状況である。なお、これは被害者供述調書作成時の警察官の説明を中心に、後に判明した部分も含んだものであ

¹³ 本稿執筆時、半年以上後も違和感がある。

¹⁴ 日本推理小説界における三大奇書の一つ、夢野久作『ドグラ・マグラ』の記憶を失つた主人公の名である。

る。退院時、自分の車の写真を撮ったときに判明した状況もある（以下、退院後、弁護士と相談した時の状況説明文を一部改変の上転記した）。

○事故状況

当方・ホンダアクティストリート（軽四輪貨物）

相手方①・車種不明（4トントラック）

相手方②・トヨタ Ipsum（乗用車）

2011年8月9日午前1時半頃、当方が北陸自動車道下り線1.6キロポスト付近を新潟方面に向かって走行中、相手方①の4トントラックが、走行車線を走る当方車両の右後部に追突した。トラック運転手の説明では、長浜インターチェンジで高速道を出るため追い越し車線から走行車線に車線変更した際、前方不注意により当方を発見するのが遅れ、追突したとのことである。（写真①「追突時の当方の破損部」）



追突後、当方は左前方に弾き飛ばされる格好で車体左側前部が高速道路路側帯のガードポールに衝突・大破した。（写真②「右前部大破の状況」）



ガードポール衝突時の反動で、当方は、再び高速道路本線側に弾き飛ばされ、追い越し車線上に進行方向に対し逆向きになって停止した。そこへ後続車（相手方②）が正面追突した。

なお、ガードポールで跳ね返った際、当方は一度横転、右側面車体が変形する程の衝撃を受けているため（写真①参照）、数メートル吹き飛んだものと思われる。この事故中、当方は気を失ったまま、ずっと車中に閉じ込められていた模様である。

頭部負傷は、ガードポール衝突時における車内ダッシュボードなどへの打撲によるものと思われる。また、車体横転時に右腕各部の骨折を負ったと考えられる。加えて、両足の負傷は後続車両との正面衝突に受傷したものであろう。

説明してくれた警察官の話では、二度目に衝突した後続車両がもう少し大きな車であれば、「目も当てられない状態になっていました」とのことである。まさに「九死に一生を得た」ということであつた。

しかしながら、これほどの事故でありながら（あればこそ）、事故当時の記憶が欠落したままなので、どこか他人事のような感覚が拭えなかった。それは、本稿を記している半年以上後も同様である。また実際のところ、ここで述べた事故状況も具体的でこそあるが、様々な証拠からそうした事態が生じた蓋然性が高いというだけであり、必ずしも事実そのままとは限らない¹⁵。

なお、事故の記憶そのものがないので当然ともいえるが、事故直後も本稿執筆時も、事故に対する恐怖感はほとんど存在しない。むしろ、事故時の記憶がふとした拍子に甦る「フラッシュバック」に対する漠然とした恐れのようなものだけが残っている。

この後、入院中から退院直後にかけて、特に仕事などしていないのに、論文を必死で書いて疲れたときのような、頭が「ぼーっ」とした感覚が続いていた。非活発だったという意味ではない。逆に見舞いにきてもらった人との対応時など、テンションは高目だったと思う。締め切り後の徹夜明けのような感覚とでもいおうか。入院中、規則正しい睡眠時間が確保されているにもかかわらず、である。あるいは、情報の処理が追いついていない感覚、頭の中で情報がオーバーフローした感覚といったほうが良いかもしれない。この感覚が最も強かった時が、一番、今いる世界というか状況に対する違和感も強かったような気がする。時間が繋がっていない、世界が連続していない、という思い。「今」、「こ

¹⁵ しかし、もし記憶さえあれば（戻れば）、それはそのままの事実として認識できるのか。このような事故では、たとえ意識を保ち続けていたとしても、おそらく事態の一部しか把握できないだろう。自身が体験した交通事故だが、それを知るのに、資料と聞き取りを組み合わせる必要があつた。筆者が普段行っている歴史研究と変わらない認識過程といえよう。

こ」に対する違和感。断絶した記憶の齟齬を、常に意識下の情報処理で埋め合わせていたという感じであろうか。

こういった感覚、どこか覚えがあるなど考えて思い当たったのが、押井守監督作品の一連のアニメーション映画だった。特に、筆者にとっては懐かしい『うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー』である¹⁶。

「今」、「ここ」に対する違和感については、本作中の次の一節、登場人物の一人「さくら先生」が事件の黒幕の妖怪「夢邪鬼」の化けたタクシー運転手と最初に対話するシーンを思い起こした。

さくら「運転手、急いでくれといったはずだが、まだ着かんのか」

夢邪鬼「はいはい、すぐです」

さくら「表通りから友引高校まで車でたかだか二、三分のはず、やけにかかるではないか」

夢邪鬼「お客さん、みなさん同じことをおっしゃいますな、タクシーに乗ると時間が延びるんですかね。お客さん、亀に乗って竜宮城へ行く話、知ってます？」

さくら「今、その気分を味わっとる」

夢邪鬼「亀に乗っていったのが太郎だけでなく、村人全員だったらどうだったでしょうね。全員が竜宮城へ行って、そしてそろって村へ帰ってきたとしたら、それでもやっぱり数百年の歳月が経っていたことになるんでしょかね。村人が誰一人気づかなかったとしても」

さくら「なんの話をしとる」

夢邪鬼「なまじ客観的な時間やら空間やら考えるさかい、ややこしいことになるんちゃいまっか。帯に短し待つ身に長し言いますやろが。時間なんちゅうのはあんた、人間の自分の意識の産物なんやと思たらええのや。世界中に人間が一人もおらんたら、時計やカレンダーに何の意味があるっちゅうねん。過去から未来へきちんと行儀よう流れとる時間なんて、初めからないのんちゃいまっかいな、お客さん。人間それ自体がええ加減なもんなんやから、時間がええ加減なんも当たり前や、きっちりしとったらそれこそ異常でっせ。確かなのはこうして流れる現在だけ、そう思たらええのんちゃいまっか」

さくら「面白い、これは本当に亀に乗ったのかもしれんな」

¹⁶ ネタバレ防止のためストーリーの詳細は紹介しないが、「学園祭前日」を延々とループするというおかしい状況に登場人物が気づき始めるところから物語が始まる。なお、本作を取り上げたのは、筆者自身の体験を説明するのに適していることと、筆者の乏しい素養では他に適当な作品が思い浮かばないということに尽きる。ご寛恕願いたい。

夢邪鬼「このまま竜宮城まで行きまっか、お安うしときまっせ」

(傍点は筆者による)

本作をはじめて観たのは劇場公開時であり、今から四半世紀以上も前のことである。まさか将来、アニメーション映画の登場人物が語るような状況に陥るとは思いもよらなかった。しかし実際、交通事故をはさんで、筆者の意識と記憶には「過去から未来へきちんと行儀よく流れる時間」などなく、「確かなのはこうして流れる現在」だけだったのである。

3. Flowers for Algernon

8月下旬、長浜赤十字病院を退院し、筆者は実家に身を寄せることとなった。通院、リハビリの生活が始まった。

退院時、事故車両が保管されているレッカー業者に立ち寄り、廃車のためにナンバープレート等を受け取った。その際、前節の事故状況報告に使用した写真を撮った。一目して分かるが、事故発生直後に「修理して乗る」つもりだった自分の車は大破全損で、とてもではないが修理できる状態ではなかった。それを見た時、この事故で最も悲しいと感じた。車両前部は大破していたが、運転席部分に辛うじて人ひとりが納まる生存空間が残されており、そのため死なずに済んだと思われる。

夏季休業の終了とともに、9月上旬には高校、同月下旬には大学の仕事に復帰した。大学の講義はパワーポイントを使うので何とかだったが、高校の授業は板書ができず、教材を新たに作成するなどして乗り切った。利き腕が殆ど使えない期間が退院後も2ヵ月位続いたが、さすがに往生した。

何度も繰り返すように、事故当時の記憶は戻らず、この時期にもそれが原因の違和感が残存した。しかし不思議なのは、事故後だけではなく、事故発生前、遡ること半時間程度の記憶も失われていることである。記憶を喪失するメカニズムそのものはまだ良く分かっていないようだ。だが、筆者に生じたこのような記憶の欠損については、記憶に関する研究から、ある程度であれば、類推の上、説明できると思われる。

筆者は自らの記憶喪失状態について説明する際、以下のような例え話をした。まず、パソコンで何かの作業をしているところを想像してもらおう。ワープロソフトで長い論文の続きを書いているところを考えてもらえばよい。たまたま電源が落ちるなどして、その日に書き加えた文章をまだ保存していない状態で、パソコンがシャットダウンしたと仮定してみよう。当然、追加した部分の文章は消えている。この例え話では、長い論文全体が筆者自身の総体的な記憶であ

り、書き加えて保存していない文章が事故で失われた記憶、そして電源が落ちるなどのアクシデントが今回の交通事故で、パソコンがハードウェアとしての脳である。あながち比喻というばかりではなく、筆者は、今回の記憶の欠落に関し、実感としてこのような認識をもっている。専門の研究者によっては、この認識の持ち方に対し、何らかの誤謬を犯していると見なす立場があつてしかるべきだとは思う。だが、記憶を部分的に失った自らの状況について、現在のところ筆者はこのようにしか認識できていない。

意識や記憶を科学的なアプローチから明らかにしていこうとする論者からは、記憶の種類に関し次のような見方が示されている。前述した筆者の認識を補強する内容である。

記憶には長期記憶と短期記憶の間に、別種のワーキングメモリと呼ばれる記憶がある。長期記憶とは脳の中のデータベースであり、自宅の電話番号や計算のルールのような記憶をさす。短期記憶とは初めてかける電話番号を、ボタンをプッシュするあいだの数十秒間憶えておくような一時的記憶である。一方、ワーキングメモリとは、現在進行中の情報処理に役立てることのできる記憶であり、短期記憶より長時間憶えておくことのできる記憶である。このワーキングメモリを生きた意識そのものとする見方もある¹⁷。

あるいは次のような説も示される。

短期記憶（即時記憶）は前記と同様であるが、長期記憶は二つに分類される。一つは近時記憶と呼ばれ、数分から数時間の記憶である。もう一つが遠隔記憶と呼ばれ、数時間以上から年単位の記憶である。脳の損傷部位などに対応して各々の記憶に障害が発生する¹⁸。

筆者が喪失した記憶は、ここでいうところのワーキングメモリ、あるいは近時記憶に該当するであろう。この点から類推する限り、どちらの説を採るにしても自らの経験と符合する。

しかし、こういった説明を受け入れながらも、釈然としない部分は残っている。今回の事故が発生する直前まで、筆者の意識は普通の状態を保っていて、その時には記憶も存在したはずである。それを喪失したというのは、いったいどういうことを意味するのか。パソコンの作業中のメモリーのように揮発してしまったのか。しかし、それはあまりにもアナロジーに引きずられているのではないか。そもそも記憶が存在する・しないというのはどういう意味か。どうも良く分からない。

あるいは脳内のどこかに事故時の記憶が未だ存在し、記憶を喪失した現在の筆者の状態とは、それを呼び出せない・アクセスできないだけなのかもしれない。

¹⁷ 荳坂(1996), pp. 91-93

¹⁸ 「記憶障害」 <http://koujinou.net/symptom/memory.html> (高次脳機能障害 net)

もし、今後、同じような時刻に同じ場所を自ら運転する自動車を通ったとして、フラッシュバックするように事故時の記憶が甦ったとしたら、この仮説は支持されるだろう。現時点で敢えて試してみたいとは思わないが、ありそうな話である。だがその場合、前述したワーキングメモリあるいは近時記憶のメカニズムとの整合性はどうなるのか。やはり良く分からない。

さて筆者は、退院後しばらくして、弁護士による交通事故相談を受けた。今後の示談交渉時におけるテクニカルな面でのアドバイスなどが中心だったが、そこで気になる指摘があった。高次脳機能障害に関する指摘である。

弁護士からは、示談をまとめる際、この高次脳機能の後遺障害は例外として明記するように説明された。何故かという、この後遺障害は、それまで異常がなくとも二～三年後に現れる可能性があるからである。実際には、示談書に明記していなくとも、この障害が現れた場合は別途補償対象になるとのことだが、明記する方がより安心・確実である。

面談時の筆者との受け答えからして、まず心配ないと思うが念のために、という弁護士の話であった。それでも、家族や友人に注意してもらって、異変を感じたらすぐに専門の医療機関に相談すべきというアドバイスは重かった。高次脳機能障害には、自覚症状がない性格の変化、という発症の仕方もあるとのことである。

頭部打撲による外傷性くも膜下出血は、9月14日にMRIによる検査を実施し、同16日に異常なしという結果が出て、おそらく大丈夫という話になった。そこで安心していただけだったが、弁護士の指摘の後、気になったので、高次脳機能障害について少し調べてみた。

高次脳機能障害の発症原因は、脳血管障害、脳外傷、脳腫瘍によるものが90%以上を占める。外傷の原因は交通事故が最も多いが、格闘技などのスポーツによる頭部へのダメージが蓄積した結果、発症する場合もある。いわゆる「パンチドランカー」である。症状は、脳のもつ記憶や意志や感情といった高度な機能に何らかの障害が発生したものである¹⁹。失語症などが典型であるようだが、受傷程度や部位により症例は様々であり、中には本人も自覚できない微細な障害が出る場合があるとされる。以前と何か違う、という程度のものもあるようだ。

自覚症状のない自我の変質というのはいったいどういうものか。自分が以前の自分とは変わってしまって、なおかつそれに自覚がないとは。そもそも、こういうように考えている今の自分は既に変わってしまっているのかどうか、それすら分からないのだ。これは循環思考に陥りそうな予感がする。また、拠って立つ土台が揺らぐような感覚でもある。

¹⁹ <http://koujinou.net/symptom/hbd.html> (高次脳機能障害 net)

当初は気味が悪かったが、しばらく経って深く考えることはやめた。脳機能の後遺障害の重篤度は、意識喪失時間の長さに比例するということが多く示されている。筆者の意識喪失時間は比較的短い部類に入るようである。ということなので、高次脳機能障害に関しては、筆者はあまり気にする必要はなさそうである。というよりも、こればかりは現時点であまり気にしても仕方ない²⁰。自覚症状がなければ、自分ではどうしようもないのだから。ただ、年末帰省した友人や研究会などで久しぶりに会う知人には、事情を説明し、以前と変わっているところはないか、一応聞いている。今のところ、皆、「変わったところはない」との答えである。

本稿執筆時点は、事故後入院していた時期から既に約7ヶ月経過している²¹。事故体験前後の記憶全体が、平板な「過去の出来事」のレベルに変化してしまったからか、事故直後に感じた「今」、「ここ」に対する違和感はなくなりつつある。高次脳機能障害も（たぶん）発症していない。だが、記憶とは、自我とは、時間とはいったい何か。今回の交通事故体験は、筆者がふだんあまり意識しないことを考えてみるきっかけとなった。

おわりに

筆者は歴史研究者であり、今までこのような文章を書いた経験はない。テーマも専門外のことである。事例報告として何かの役に立つかどうか、はなはだ心許ない次第である。個人的な体験談につきあってもらって申し訳ない、という気持ちを感じている。ただ、このように自分の身に降りかかった災厄を文章化、対象化することで、自身の気持ちが整理できたように思う。

事故後間もない時期、ふとした話の中で、冗談交じりに「案外、ガンなどの病気で苦しんで死ぬより、交通事故で即死する方が楽かもしれない」と語ったことを憶えている。事故時の記憶が失われているのだから、そう言い切れるはずはないのだが。やはりこの時はまだ、違和感に苦しんでいたのかもしれない。

その後、しばらく経った10月の半ば平日の正午頃、堺の実家から大阪府立大学への道すがら、白鷺公園を通りがかった。いつも通り過ぎるだけのあまり大した公園ではない。その日は秋晴れで、日差しは暖かかった。汗ばむくらいの陽気である。ベンチに座ってみた。目の前には池、高い空に点々と雲が浮かんでいる。乾いた涼しい風が吹き、心地よかった。

生きてて良かった。ふと、そう思った。

²⁰ 事故後、急に気が大きくなったとか、物事への関心が失われたという変化は見られないようである。むしろ、このように割り切れるのは、生来の楽天性が理由であろう。

²¹ 救急搬送時の状況などは、直後にメモ書きを残してあったのでそれを基に清書した。本稿の中にも多数の時間軸が存在する。

資料・文献一覧

押井守監督作品（1984）『うる星やつら 2 ビューティフル・ドリーマー』スタ
ジオぴえろ

苧坂直行（1996）『意識とは何か』岩波書店

高次脳機能障害ネット <http://koujinou.net>